

空中花粉と花粉症　－国内・国外の動向について－

国立病院機構福岡病院アレルギー科

岸川 禮子

わが国の戦後復活再興の目的で国を挙げてスギ林などの植林を行ったが、社会背景の変化とともにスギ花粉症の発症問題は大きく捕らえられ、国が主眼となって増大したスギ花粉症対策に多方面から取り組んできた。1980年代後半より開始され、対策が講じられてきたが、2009年現在もまだ花粉症問題は決定的な対策が困難で毎年、対症的な方法で花粉飛散時期を過ごしている。その中で花粉情報、治療法、環境対策は年々充実している。

これは、国外でも同様で、200年以上の花粉尘対策を行っている英国でもイネ科花粉症は根本的な対策がないまま現在に至り、毎年花粉症・気管支喘息症状対策を対症的に行っている。北欧のシラカバ花粉症は OAS（口腔アレルギー症候群）を高率に合併しており、花粉飛散時期の食生活はアレルギー症状出現に注意する必要がある。その中で欧州は EPI（欧州花粉情報網）を構成し、これらを通してネット上で欧州全体の花粉・花粉症対策を取ることができるようになっている。

また米国では秋のブタクサ花粉症の頻度が高く、気管支喘息や花粉症の原因としてイネ科花粉症とともに喘息の悪化因子として対策が取られている。全米全体、州毎、都市毎にジップコードを挿入するとその週の花粉尘情報がわかるような対策をとり、花粉症の予防に努めている（Pollen.com）。

わが国では幸い針葉樹林のスギ・ヒノキ科のみが花粉症の最大の抗原であるが、国外では、イネ科、ブタクサ属などの草本類が非常に多く、季節性もほぼ年間を通して抗原花粉が飛散している地域もあり、その治療対策は困難を極めている。

最近、欧州にブタクサ属が繁茂し、非常な勢いで拡大しているため、欧州全体で対策カンファレンスが開催されたり、米国の PAAA と協同で花粉情報活動を行うなど緊急対策が取られており、ブタクサの増加は世界的な脅威になりつつある。その背景には温暖化など気象条件や人為的な条件などがからんでおり、ブタクサ花粉症は重症化するためその対策が急がれている。

以上のように文献的に世界の状況について簡単に紹介し、現在・将来の問題点などを検討するのに役立てたい。